

執筆者紹介

とおやま こう
遠山 浩 本学経済学部教授
なかむら ひさき
中村 尚樹 本研究所客員研究員
なかむら よしあき
中村 吉明 本学経済学部教授

〈編集後記〉

2022年冬季北京オリンピックがコロナ禍の中で開催され無事に終了しました。多くの日本人選手が活躍され、なかでも本学の経営学部3年次の重森航君がスピードスケート種目で銅メダルを獲得されたことはたいへんな快挙です。この場をお借りして祝福の意を表します。

その北京。オリンピック史上初となる夏、冬の両方の開催都市となったのは偶然ではないように感じます。まさに中国経済の拡大勢力がスポーツ界にも到達したかのごとくです。私自身も開会式、閉会式が盛大に行われている様子をテレビでみて、中国経済の豊かさを改めて感じました。皆様は、どのようにご覧になりましたでしょうか。

さて、月報1月号をお届けします。本号は、三人の方からご投稿いただきました。いずれも説得力と刺激に満ちた論考であります。以下、簡単ですが紹介させていただきます。

まず、遠山論文「日本のDX社会推進に向けた海外との連携について」は、エレクトロニクス関連産業に着目して、かつて国際競争力を有した日本の京浜工業地帯から中国の華南地区への産業集積の移転過程を概観したうえで、その移転過程における日本企業の組織・ネットワーク再構築のあるべき方向性を考察しています。そして都市型産業集積広域化の観点を加味しながら考察を深め、今後日本のDX（デジタル・トランスフォーメーション）社会推進に必要とされるのは、海外との連携であるという結論を導いています。

次に、中村尚樹論文「ロボットやアバターと共存する未来社会へ」は、ロボット先進国日本におけるロボットやアバターの最先端の研究開発プロジェクトの事例を紹介しながら、今後に予想される、あるいは期待される「未来社会像」というものを野心的に展望しています。「ロボット」は、かつて空想の産物であったのが、もはや現実空間に入り込んだ実用的な存在へと変貌しており、ひとりの人間が様々なアバターを使うことで実世界での活動が多様に広がったり、仮想世界で働くことも可能になると予測しています。

最後に、中村吉明論文「DXで変わる日本の産業」は、電機産業、総合電機メーカーにおけるデジタル・トランスフォーメーション（DX）が、日本企業や産業社会にどのような影響を与えてきたのか、またその影響の範囲は今後どのように広がっていくのかを考察しています。DX、すなわち新しい技術の産業社会への浸透は、たんに「つながる製品」が財サービスとして生産・消費されるだけでなく、企業組織の変革や新たな付加価値の創出に資する源泉となっている点こそ肝要なのだと主張しています。

皆様に、ご高覧いただければ幸いです。

埴 武郎

2022年1月20日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

（発行者） 大 矢 根 淳

製 作 株式会社グラフィカ・ウエマツ

新宿区下落合 4-21-19 目白LKビル3F 電話 (03)6915-3835
